
古い月

郷山行進

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古い月

【Nコード】

N9934A

【作者名】

郷山行進

【あらすじ】

水門の町。吹き荒れる黒い嵐。大地は削られ。消えていく。一年の大半を夜の闇が支配し。月ばかりが海を銀色に照らしていた。これはそんな終わりの迫った世界で、懸命に生きていた。ある小さな海の上の水門と言われる町の、一人の少年と世界のお話である。

第一章 第一話 「嵐―始まり―」

古い月

郷山 行進

序章

水門の町。

吹き荒れる黒い嵐。

大地は削られ。

消えていく。

人の多くは大地を追われた。

やがてわずかとなった大地に生きるがゆえ、

愚かな争いを生んだ。

一年の大半を夜の闇が支配し。

月ばかりが海を銀色に照らしていた。

激しい戦いと、続く貧困。

そのうちに戦い続ける事は、できなくなった。

やがて耐え抜いた人々は生き残り、静けさの中、ひっそりと生き続けた。

これはそんな終わりの迫った世界で、懸命に生きていた、ある小さな海の上の水門と言われる町の、一人の少年と世界のお話である。

第一章 第一話 「嵐―始まり―」

一人の男が石畳を駆けてくる。年は、・・・三十代、二十代後半と
いった感じの若い男だ。男の長いコートが風になびいた。

やがて男は低いハッキリとした口調でつぶやいた。

「リブ。オールを呼んで来てくれ。」

「わかった。」

男の陰に隠れていたもう一人、幼い少年、青年位か・・・顔が童顔
なためか、幼く見える。声は声変わりの真っ最中か、枯れた感じだ。
少年が水路沿いの道を走りぬけていく。それを男は見送った。と、
手もとから金属のぶつかり合う音、取り出したのは鍵だ。

丸い輪つかにいくつもの鍵がついている。一つ一つには名札がふっ
てあり、一目でわかるようになっていく。

が、男はしばらく鍵捜しで時間を使っている。見つけたらしい。鍵
を開け、蝶番の音があたりに静かに響く。

「？」

男が近づく足音に気づく。振り向くと足音の主は親しげに声をかけ
た。

「おうローキー。・・・いよいよくるころとは思ったんだがな。」

「ベアか、ここのところ少し遅めだったから油断していた。」

「まっただ。今頃オールも飛び起きてるころだろう。」

ベアという身長の高い、筋肉質の男とコートのローキーは話しながら
狭い梯子を上っていく。

梯子は水門を制御する部屋につながっていた。周りにはメーターや
ハンドルがある。

それらは錆びていたが、機械油がしっかりと注してあり、整備は完
璧だった。

蝶番がきしむ音。ローキーがひさしを上げ、外を見た。

「見えるか？」

声は後ろで鎖を外していたベアのほうだった。

「いや。見えはしないが、この風は間違いない。」

見上げた視線の先には外壁から張り出すようにつけられた尾の長い旗がなびいている。風は穏やかだ。

「静かだな。」

「ああ、さっきこいつに気づいて心臓が止まるかと思ったよ。」

「・・・。」

ベアは無言でハンドルのほうへ向き直った。

「風が変わったぞ。まもなくだな。」

ローキーは奥の階段を上っていく。

まもなくして、梯子を上る鈍い軋みが聞こえた。

「遅いじゃないか、オール。そろそろくるぞ。」

オールという名の男、少し太った感じだが、体格がよく、力持ちの印象を受ける。

「すまないな。リブのやつにたたき起こされるまで熟睡していたよ。」

「

ベアは力強く手元のレバーを引いた。

「そつえば、そのリブはどこに行った？」

「今港に行つて船が出ていないか確認している。」

オールは着込んできたコートを脱いで、埃を被った古い椅子に掛けた。

ローキーは塔の屋上にいた。風はさっきと同じ方向に吹いている。旗がなびいていた。

「・・・あれは・・・。」

水平線のかなたに何かを見つけた。

海は静かで、馬鹿でかい月の銀色に照らされ、輝いていた。

梯子が激しくきしむ。大きな音が制御室に響く。そしてリブがひよこつと頭を出した。汗だくだ。

「やばいよ！オクトの船が網上げに行つたままだ！」

部屋に緊張が走った。ギリツと縛られた感じ、そんな空気だ。

「オール！ベア！船が見える！上がって来てくれ！」

三人が階段を駆け上がり、屋上に出る。手すりにローキーが身を乗り出すようにしている。

「あれか！」

上がってきた二人は飛びつくように手すりに引つ付いた。

「結構距離があるぞ。」

「気づいていないかもしれない。リブ！照明弾は！？」

すかさず、リブが階段を上ってきた。手にはなにやら頑強な箱が抱えられている。

「オクトの船だ！早く！」

リブはバチンと箱を開いた。中には口径の大きな銃のようなものが入っている。

「オールとベアは水門の準備にかかってくれ！合図で閉められるように頼む！」

「わかった！」

「おう！」

二人とも返事よりも早く階段を駆け下りた。

「ほら！」

リブは手際よく照明銃を組上げると弾を込め、ローキーに投げ渡した。

「よし。」

照明銃を構え、月を狙った。

「気づいてない、間に合うかな・・・。」

「気づかせるぞ。」

ゆれる船の上、二人の人影が動く。二人は網を上げ終わり帰り支度

を始めていた。

「なあ、父さん、あれって……。」

「どうした。」

若い男、息子であろう。二人は指差す方向を見た。光の帯が高く上っていく。蒼い閃光がほとばしる。

「気づいたかな。」

「あの親子だ、すぐに気づくさ、だからさっさと戻って来い！」

薬莢が地面に転がる、ローキーはまた弾を込めると月を狙い、引き金を引いた。

「ローキー！こっちは準備できたぞ！」

下の階から声が聞こえた。

「わかった！しばらく待機してくれ！」

「父さん！早く！」

「急げ！そっちの帆を張るんだ！錨をあげろ！」

二人があわただしく船を帰路に向ける。

「よし、急いでロープを……。」

オクトは息子の異変に気づいた。船の後ろを見て、呆然としている。オクトもまた、振り返った。

水平線に黒いうねりが見える。それはたちまち高くなっていく。風が吹き始めた。

「！」

「来たか！」

ローキーが声を上げた。

「……またきたか……。」

リブが立ちすくむようにその光景を見ていた。黒いうねりはどんどん空を埋めつぶしていく。

目の前の水平線すべてから黒い壁が迫っていた。

海にオレンジの閃光が走る。リブがはっとして叫んだ。

「気づいた！」

「さあ来い！急げ！」

「タオト！帆をしっかり保て！」

「ああ！」

タオトはオクトの息子の名だ。ロープを放すまいと体を斜めにして耐えている。

気づけば黒い風が頭の上にまで覆い被さって来ていた。

「俺ら・・・死んじゃうのかな。」

「勝手に死ぬな！生きて帰るんだ！」

もうすぐ後ろにまでうねりが迫っているように感じた。

「だ、だって・・・。」

頬を暖かさも冷たさも感じない風がなでた。

「つく。タオ！手を離すなよ！」

帆が激しく波打つ、風がさらに強まった。

「・・・こ、こいつが、リブの家族を殺したんだろう？」

「その話はよせ！・・・とくに、リブの前ではな。」

「間に合う・・・だろうか・・・。」

ローキーは銃を脇に抱えてリブをつかみ、階段を下りた。

「ローキー！まだ来ないのか！」

ローキーは無言のままひさしの所まで行った

「間に合ってくれなきゃならない。」

横の鉄の扉を開けてオールが入ってきた。

「町中のみんなは避難した。『盾』の準備も万端だ。」

「わかった。」

ローキーは椅子に前かがみに座り、親指のつめを噛んだ。不安な時の、いつもの癖だ。

リブは照明銃の入っていた箱に乗り、ひさしから外を見ていた。

「・・・間に合わない・・・。」

そうつぶやくと急に駆け出した。

「!?!」

「リブ!どこへ行く!」

「おい!」

皆の制止も聞かず、梯子を滑り降りる。

「おい!」

オールが町を見渡す窓から、走っていくリブに向かって呼びかけたが、聞こえていないようだった。

「いったい何を考えて・・・!?!」

水路を走る影、水門へと一目散に突っ切っていく。ベアは何者が気づいた。

「リブの小型艇だ!」

「あ、あいついったい何を!まで!外へ出るな!」

ローキーは鉄扉を開けて引きとめようとしたが、リブは全速力のまま真下の水門の間をくぐって行った。

「あいつ!」

ローキーは梯子を降りていく。

「あつまて!・・・たく、二人しておんなじだぜ。合図送る奴がいなくなつてどうするんだ。」

ベアはブツブツ言った。

「っふ。」

ローキーは隣の物見の塔まで登ってきた。息を切らしている。

「リブだぞ!あいつ何考えてんだ!」

そこには数人の若者がいた。

「・・・た、『盾』は準備できてるか?」

「あ!ローキーさん、万端です。それより、リブですよ!」

「ああ、止め切れなかった。」

見ていた一人が声を上げた。

「船まで行つて、・・・戻ってきたぞ！」

「なんだ、何か持つてる、・・・ロープか？」

「！」

ローキーの思考が凄まじい勢いで動き出した。突然港のほうへ身を乗り出した。

「ど、どうしました？」

目の前に、一隻の船が泊まっている。

「リッジオ！お前の船のキーを貸せ！」

「えあ？は、はい。」

リッジオは船の鍵を放るとローキーはそれを受け取り、階段を駆け下り始めた。

「ど、どうしたんですか！？」

「お前の船だ！」

「はあ！？」

「お前の船には巻上げ機がついてるだろ！」

「いそげ！」

「はいっ！」

リッジオはエンジンを始動した。重いエンジン音が静まり返った町に轟く。ローキーは周りの取り巻きに言った。

「みんな手伝ってくれ！この船を港に固定するんだ！かかってくれ！」

「おう！」

いつせいにみんなが動き出した。ローキーは船から飛び降りると水門へ走っていく。

遠く、水門のほうから誰かの声がした。

「リブが来たぞ！」

ローキーは水路の脇の道をひた走っている。するとエンジンの音が聞こえてきた。

水門の間をすり抜け、小型艇に乗ったリブが現れた。

リブはローキーの姿をみると、ロープを持った方の親指を天に立てた。そしてニツと笑った。

ローキーはちよつとうつむいた、口元はニヤリと笑っていた。

「うまくやれよ。」

「ああ。」

二人の会話はすれ違う一瞬に行われた。

「リブ！」

取り巻きが口々に言った。リブは無言のまま小型艇を船の横に着けると、すばやい動作でロープを巻き上げ機の端にくくりつけた。

「行くぞー！」

リブは思い切りレバーを引いた。手入れが不十分で、えらく硬いが、引ききった。

少し間をおいて、巻き上げ機は動き出した、どんどん速度が上がっていく。周りからどよめきが起こる。

「・・・ま、間に合えっ！」

「と、父さん！」

「つかまれ！」

タオトは舳先にロープを縛り付けた。あまったロープに体をくくり、しがみついた。

歓声が起こった。

「ぐんぐん近づいてるぞ！」

「いいぞー！リブ！お前は天才だー！」

リブは表情を緩ませはしなかった。

間に合わないかもしれない。いや、間に合わせる。

心の奥にそんなことが浮かんでいた。

黒いうねりは町の中からも見え始めた。

「ベア！オール！いいか！」

「いつでもオーケーだぜ。」

「おう。」

二人ともレバーに取り付いていた。ローキーはひさしを閉め、ガチヤンと鍵を掛けた。

「ロキ、そろそろだな。」

扉から一人の男が言った。

「ああ、『盾』準備を。」

「わかった。」

男はそう答え、身を翻すと通路を駆けていった。

「・・・万全だな。あとはあれだけだ。」

ローキーは階段を上っていく。

すでに黒い壁は目前に迫っていた。その影に覆いかぶされる形で小船は引き寄せられていく。

「ぎりぎりか・・・。」

ローキーは誰に言うでもなく、呟いた。

「ロキ！限界だ！待てないぞ！」

「わかってる！」

下からベアの声がした。

ローキーは場所を水門の真上に移動した。

「来い、・・・来てくれ、頼むぞ・・・。」

風の凄まじいうねりが近づいている。もうあたりは風の音しかしなかった。

しばらくの沈黙。ローキーの首筋にも黒い風を感じた。そのとき、かすかに水音が聞こえた。

「来た！！」

どこかで誰かが叫んだ。そしてローキーにも船が見えた。うねりに押しつぶされるようにして辛うじて浮いている。

「今だ！！」

「うおおお！！」

ベアとオールは力いっぱいレバーを引いた。

ゴーンという音とともに水門が閉まりだす。閉じるぎりぎりで小船がかすめて滑り込む。

「やったー!!」

「やったぞー!!」

歓声が広がる。

「ロキ！」

水門が閉まりきり、巨大な横柱によって扉が固定された。港のほうまで船が引かれていくのを見て、ロッキーため息をついた。

その瞬間、『盾』が起動した。

轟音とともに真後ろから巨大な『盾』が立ち上がる。町の周囲を巨大な盾が覆っていく。

それから少しして、黒い嵐がその盾に激突した。

唸るような地響きと凄まじい振動が町を揺らす。

「ロッキー！やったな！」

下からベアがやってきた。ゆれのため手すりにつかまり、よろめきながらロッキーのそばまで来た。

「リブに礼をいわなきゃな。」

「おっと！ああ、そうだな。」

第一話 「嵐―始まり―」 終わり。

第一章 第二話 「嵐の夜」飛行都市ヴェレクタ」（前書き）

第一話は読みきりというか、つかみのような形をとっていました。大体の世界観が伝わればよいかなと。大きくストーリーが動くのはこれかなになります。御感想いただけたら幸いです。

第一章 第二話 「嵐の夜」飛行都市ヴェレクタ」

第一章 第二話 「嵐の夜」飛行都市ヴェレクタ」

嵐の夜。何度と無くやってくる嵐。この黒い嵐が吹き始めたのは僕が生まれるずっと前からだそう。僕は長老の言う朝日と言うものを見たことが無い。

嵐がやってくるようになって、空は灰色の雲が支配していた。雲の晴れるのは夜。太陽さえも僕は見たことが無い。

暗黒の時代。雲に厚く覆われた空。その雲が晴れるのは夜。月の明かりだけが空から注ぐ唯一の光だった。

ベットに入ったものの、眠れない。窓の外は黒い嵐が吹き抜けていく。風の音にももう慣れたはずなのに、だめだ。

僕はコートを着込み、町へ出た。空一面、嵐が吹きぬけていく。嵐の夜はいつにも増して暗い。

街道を歩いていくと、前から光が近づいてきた。

「リブじゃないか。どうした。」

光の主、ローキーだ。ローキーはよく話をする、兄のような存在だ。家族のいない僕にとって、誰よりも僕のことを理解してくれている。

「ちよつと散歩。」

「そうか、見回りがてら、付き合つよ。話でもしよう。」

・・・

島の向こうに見えるのは、灯台である。

でも、灯台って言うほど、綺麗な見た目じゃない。嵐のときに、町に直撃しないよう、その流れを分断するためでもあるからだ。だから、見た目は要塞のように見える。

あそこは僕にとっても、大切な場所なんだ。

あの辺りだと、結構大きな魚がつれたりするから、ぼくも、漁に行く知り合いに頼んで、あの小島まで乗せていってもらうことがある。僕らの生活が、この高い壁の中でしか、行われていないわけじゃない。そう思える数少ない場所だ。

そして、ぼくにとつてそこが、大切である二番目の理由。それはそこで、父さんが死んだと言うことだ。

父さんは研究をしていた。この嵐がどこから来て、どこへ行くのか、触れるだけで、命を奪うこの嵐は危険だと分かっていたけど、父さんはそれでも研究していたんだ。

結果的に、嵐の前兆ともいえる、北東からの風や、波の変化を確認したわけだ。それで町は、安心して漁にも出られるようになったし、みんな感謝していった。

でも、その年に何倍も規模の大きい嵐がきて、灯台は崩れた。そのときに父さんも・・・

探したけど、父さんは見つからなかった。

次の日、よく晴れた星の綺麗な夜、集会が行われた。

月に数回、長老と、この集落の有力者が集まって話し合いがされる。今までのことと、これからについての話し合いだ。

その場に、若い連中を取り仕切っているということで、ローキー、そしてベアが出席していた。

「・・・来月、共意思会議が開かれる。今回はヴェレクタということだ。」

すこし会場がざわついた。

「ここのところ、ほとんど毎月のように行われているのは、知つてのとおり東部の大国、ガロンの共意思連合からの脱退問題が大きな焦点になっているからである。」

我々としては、なんとしても分解だけは避けたいのだ。」
ベアが口を開いた。

「・・・50年前のあの日から、わたしたちがここまで築き上げた関係なのだから、ここで、たとえひとつの脱退とはいえ、これまでの努力を無駄にはしたくない。それに、理由もまだ公言していない・・・今回の話し合いで進展があることを期待したい・・・。」

「今回の会議には、わたしは行かない。」

長老がそういつて、会場は騒がしくなった。

「それじゃあ、今回はどうするんですか!？」

「出席しないわけにはいかんでしょう・・・。」

今度はしんと静まり返った・・・

「今回は、ベアとロキ、それとリブに行ってもらう。」

「ベアとロキは分かりますが、リブ？」

「リブは、そろそろ外の世界を見ておいてもいいころだ・・・。」

長老は静かに語った。

「それにあの子は、15年前の暗い三年間の時に生まれた唯一の子供なのだ。運命的なものを感じないわけが無いだろう。」

数日後、棧橋に数人の影があった。

明かりに顔が照らされた。背の低い影の主はリブだった。何日か前、ロキから大陸に渡ることを告げられ、内心不安ではあった。

リブはこの街から出たことがなかった、それに、この『壁』の外の世界というのを知らなかったせいでもある。

「ようし、忘れもんじゃないな。そろそろ時間だぞ。」

声はベアだ。それにロキが答えた。

「そうだな、見送りありがとう。長老、エダ。」

「気をつけてな・・・。」

「では、あなた方のいない間、若い連中のことはわたしが責任もって監督します。安心していつてください。」

エダ、若い連中の副リーダーといったところだろうか。ベアにそう言った。

「じゃあ。」

三人は手を振り、船へと乗り込んだ。
エンジン音が静かな夜の港に響く。
ゆっくりと船は外門へと進む、見慣れた街の中を抜けていく。こうして、流れていく静かな街は、新鮮に見えた。
船は外門を抜け、次第に速度を上げていく。がくんと船に振動があった。その次の瞬間、船は水面から離れた。

「リブ、後ろに乗つけてきたのって・・・。」

「うん、俺の船だよ。使う機会があるかと思つてさ。」

「ふうん・・・。使う機会つていつたつて、勝手に乗り回す気か？」
リブはちよつとドキツとした。

「そ、そんなわけ無いだろ！町のために選ばれた仕事なんだから・・・。」

「どうだかなあ。」

ベアは呆れ顔だ。

リブは愛想笑いをした。と、操縦席のロキがつぶやく様に言った。

「そろそろ国境だな・・・。」

それからしばらくして、聞きなれない音が聞こえてきた。

ヒョンヒョンヒョン・・・

「？」

リブはひょいと甲板に出た。

「うわあ！」

船の周りを小型の船が飛び回っていた。

僕はこんな小さくて、機敏に動く乗り物を見たことが無かった。
「びつくりしたか？ヴェレクタの国境警備隊だ。」

後ろから、同じく船室から出てきたベアがそう言った。

「町に着いたらもつとびつくりするぞ。いまから腰抜かすこと無いからな。」

リブは座り込んでいた。ベアが笑いながら船の舳先の方に移動すると、小型機がスピーカーだろう、それでこちらに話しかけてきた。

「こちらはヴェレクタ航空軍である。そちらの船の国籍と航行の目的の通達を要求する。」

「さてと、どこだったかな？」

ベアはしゃがみこんでハッチの中を覗き込んでいる。小型機は続けた。

「まもなく我が国の国境を越える。返答の無い場合、相応の対処を執行する。繰り返す……。」

「ね、ねえ、ベア……。」

「おしと、まあ、心配するな。さて。」

ベアが起き上がり、舳先に国旗を掲げた。

「我々は水門の町のものだ。共意思会談のため、貴国への入国を許可願う。」

ロキが拡声器でそう伝えた。するとすこしして、

「その声はローキーだな。了解だ。話は聞いている。許可する。」

どうやら声の主はロキと知り合いのようだった。それから船は少し進路を変えて夜の空を進んで行った。

小型機はこの船の少し前を隊列をなして飛んでいた。と、海の彼方に光が見えてきた。

「我が飛行都市、ヴェレクタにようこそ。君たちを歓迎する。」

船の上から町を見下ろす。町から海にかけて無数のパイプが引かれている。

それは大小さまざまで、それぞれが海に扇状に張り出た塀に続いていて、水門につながっている。そしてその水門は巨大な機関が付いていた。

「……。」

リブが興味深そうにじつと見ていた。ベアがそれを説明した。

「俺たちの町には南の海岸に波力発電機があるだろ？あれは町から来る大量の水源を利用した発電機だよ。この町には風が吹かないんだ。」

それのおかげで、嵐は来ない。代わりに波もないし風力発電もできないから、ああいった発電装置が考案されたんだ。」

「・・・あのさ、あの飛んでる船は？」

リブは興味からそんなことをきいた。

「あれは隣の国で発見されて、それをこの国が改良したんだ。小型化された飛行機械っていうのはこの国が一番進んでるんだ。」

「あれで発電とかできないの？」

「いやあ、できるだろうな・・・でも単価が高いだろうし、効率も今のほうがいいらしい、それにこの巨大な街をまかなうほど大きな機関は作れないだろうな・・・いくつも作るってのも、同じことだろう。」

「ふうん・・・。」

船はゆっくりと港のほうに向かっていく。港といっても街のはずれの高台で、滑走用の水の引かれている飛行型船舶専用の港だった。もちろん海のほうにも港はあった。

うえから見かけたから間違いない。

船は速度をぎりぎりまで落とし、ゆっくりと着水した。波止場に立つ人の指示で船を横付けした。

「ようこそヴェレクタへ。入国管理局のエノアです。」

メガネをかけたやせた男が手を伸ばす。

「ああ。ローキーだ。よろしく。」

ローキーはその手をつかみ、港に上がった。

「そちらの方は、ベア様でいらっしゃいますね。」

「ああ。」

ベアが船室から出てきた。メガネの男、エノアはリブの事を見た。

「・・・こちらは？」

「リブだ。わけありでな。聞いていないのか？」

「失礼。三名でしたか。実は私も詳しくは聞いていないのですよ。・

・若干の隠密性がありましたね。」

ベアがリブを片手で持ち上げて港に上げた。初めて踏んだ外の世界の地面。ちよつと不本意ではあったがリブは感動していた。

「・・・いろいろと面倒なことになってきたな。そんなになのか？」

「・・・ええ。」

ベアとエノアが少し小声で話している。リブはいまいち内容が分からなかった。

「で、管理局の人間が出迎えとはね。」

四人が波止場をロビーに向かって歩いていく。

「これから行くかと思っていたんだがな。」

ベアがやたらでかいバックを背負っていた。

「ええ。・・・まあ、時間も時間ですし、詳しくは明朝と言うことで。事務局には連絡しておきます。」

四人は港を出ると、深夜だと言うのに活気のある表通りをさけるように街を少し歩いていった。

「今夜はこちらにお泊まり下さい。外出は自由ですが、我が国の入国許可書がないうちはあまり目立つようなことはしないでくださいね。」

「そこまで俺たちはガキじゃないよ。明日の朝、事務局に行く。まあ、一応連絡はするがな。」

ベアがエノアの放った鍵を片手で取ると言った。エノアは軽く会釈をするとすぐに立ち去ってしまった。

「うおおお~~~~！」

ベットに飛び込む。自分が跳ね上がる。

「結構いい部屋じゃないか。おいリブ。子供みたいな真似はするなよ。」

「凄いふかふかだ！」

ローキーがその後に続いて部屋に入ってきた。

「それじゃあ悪いがちよつと出てくるぞ。」

「おう、こりゃ凄いな。・・・ああ、久しぶりに旧友に会ってくるんだろ？」

ベアがベットで跳ね上がりながら言った。

「まあな。」

ベアがバックの中身を広げて何かを取り出した。

「おい、これ土産に持ってけ。」

そういつて小さめのビンを投げた。いつもベアの飲んでる酒だ。

「おい、いいのか？」

「ああ、俺は書類の整理があるから今日はおとなしくしてるよ。なに、部屋で飲む分の酒ならいっぱいある。」

そういつて手元から別のビンを取り出した。

「はつはつは。入管引つかかるぞ。・・・じゃあ行ってくる。」

ロキはビンをしまいこみ肩掛けの小さめの鞆を背負った。

「ははは、やばいかもなあ！じゃあ、楽しんで来いよ。」

「ああ。」

そういつて部屋を出て行った。

「ねえ、入管まずくないの？」

「ん？ああ、リブは知らないな。まあ、知る機会も無かつたろうし、教えとくか。この国と水門は国としてのやり取りをしてるわけじゃないんだ。」

水門も国って言うよりや街だろう？つまりはヴェレクタの中のひとつの街として水門はこの国と付き合ってるんだよ。」

ベアは資料をテーブルに広げると椅子に座った。

「だから別に入管に引つかかるってことは無いし、それに引つかかるほど山ほど持ってきてるわけじゃないからな。」

ベアはタバコに火をつけた。と、扉が開いた。

「ロキ、どうしたんだ？」

「いや、忘れ物だ。一応仮入国書もって行ったほうがいいだろうからな。」

「ああ、それならここだ。」

ベアがテーブルに青いカードを出した。

「ああ、わるい。そうだ、リブ。」

ベットから起き上がった。

「なに？」

「元気あるか？」

そうしてリブとローキーは街に繰り出した。始めて見る街の風景。きらびやかな通りを歩いていく。

始めて見る肌の色の違う人々や見たこと無い生き物。何もかもが新鮮でときどきしていた。

その様子をローキーはうれしそうにみていた。そしてその中のひとつの酒場に入った。

「いらつしゃい、おお！ロキ！久しぶりだな！」

入るなり店のカウンターから威勢のいい声が聞こえた。

「やあ、おっちゃんも元気か？いつ来ても繁盛してるみたいだな。」

「ああ、元気だよ。ここはいつでもお祭りさ。そうだ。もう待ってたぞ。いつもの席だ。」

「ああ、ありがとう。」

ローキーはリブにカウンターに座るように言うとその後ろのテーブルにかけた。

「よう。」

「おう。」

テーブルに着くなり、そこにいた男と酒を酌み交わした。リブはその様子をカウンターからのぞき見るように見ていた。

目の前にグラスが置かれ、それに気づいて向き直ると酒場のおっさんがいた。

「やあ。この街は初めてかい？」

「あ、うん。」

「私はボリスだ。まあ、店の名前になってるから分かると思うけどな。さあ、飲んでくれ。」

そっいつて目の前のグラスを勧めた。

「え？」

「アルコールは入ってないよ。ロキの客人だから、私のおごりだ。」

「おー！おっちゃんいい人だね！」

「ははは、まあ、退屈しないでいてくれよ。」

そっいつてボリスは向こうの客のところへ歩いて行った。

「・・・少佐か。まだすっかり空軍やってるんだな。ジル」

「ああ。どうなんだ？水門は？」

「何にも変わってないよ。そうだ、ミルザが結婚したぞ。」

「ミルザが？本当かよ。相手は誰なんだ？」

「二年前の共意思会談のときに知り合ったって言う女の子だよ。エルド出身だそうだよ。」

「あいつ、エルド語得意だったしな。ミルザのやつ、国の大切な会議だっけというのになにやってるんだか。」

「ああ、まったく。・・・いまはせつせと道具屋手伝ってるよ。」

結構勉強してるらしくて普通に話す分には問題ないくらいヴェレクタ語も話すよ。」

空軍の男、ジルはグラスを置いた。

「・・・で、お前はとうなんだ？」

ローキーもグラスを置いた。中身はほとんど入っていない。

「ああ・・・。なんだかねで忙しくてそれどころじゃないよ。ま、いい訳か。」

ロキは笑っていた。

「・・・お前のほうはどうなんだ？」

今度はロキがジルに聞いた。

「・・・婚約したよ。先月だ。」

「本当か！めでたいじゃないか。誰なんだ？」

ジルは少し恥ずかしそうに笑った。

「誰って言うてもわからんだろう。ガロンの娘だ。知り合ったのは・・・？」

ローキーがそれ以上言うなと手でとめた。

「何でもいいさ。聞きたくないしな。婚約祝いだ。これやるよ。」

ローキーは笑いながらベアの渡した酒を手渡した。

「・・・ありがとう。」

少し間をおいてジルが礼を言った。

「式はいつだ？冷やかしにきてやるよ。」

「だったら来るなよ。」

ジルは笑っていた。

「来月の頭だ。ヴェレクタの教会でやる。絶対来いよ。」

「ああ。」

二人が結婚の話で盛り上がっている。酒のせいもあるようで二人とも酔っているようだった。

リブはちよつと暇になっていたのでボリスにいろいろと聴くことにした。この国に来て気になることがいっぱいあった。

「ねえ、おっちゃん。」

「おう？なんだ、もう退屈か？」

「空軍の飛行機、あれってどうなってるの？僕さ、あんなふうに飛ぶ乗り物見たこと無いよ。」

「ああ、あれか。すごいだろう？そもそもこの国が鉱物資源に恵まれているのがあったおかげでそういう技術が高いんだよ。

それであそこまで小型化されてるんだ。基本的に飛行船舶と同じ構造だよ。」

「てことはシリンダーが入ってるの？」

「そうだな。小型化軽量化が進んでいくつもつけることが出来るか

「あれだけビュンビュン飛ぶんだな。」

「それじゃあ出力はどうなってるの？てことはエンジンも小型化されてるの？・・・あ、いくつもつけて上手く飛べてるってことはバランサーがどうなってるんだろ。う。ねえ。」

「・・・少年よ、詳しいんだな。あいにくおっちゃんの頭が付いて行けないよ。」

ボリスが難しい顔をしていた。ちょっと残念だった。機械工作が趣味のリブはいろいろ知リたがっていた。すると、リブの隣に少し太めの男が座った。はげ頭で髭の白いオヤジだった。

「おい坊主、そんなにフライヤーに興味があるのか？」

「・・・う、うん。おじさんは？」

「専門家だ。」

ボリスはやつと放してくれたのでほっとして向こうに行ってしまった。

「専門家って？」

「わしも工房を持っておる。うちで改造も何でもやっておるからな。」

「

白髭オヤジは持っていたビンの琥珀色の酒を一飲みした。

「僕の船改造できる！？」

「なんだ、お前さん船もつとるのか。贅沢なガキだのう。・・・そんなに言うなら明日の夕方にでもうちに来い。これが地図だ。」

そういつて白髭オヤジは紙切れにペンでガリガリと地図を書くと、ふらりと立ち上がり、そのまま店を出て行った。

「いよし、帰るぞ、リブ。」

ロークはすっかり酔っ払っていた。

「おい、大丈夫か？」

ジルがそれを心配していた。

「ああ。」

そういつてロークはよろめいた。大丈夫じゃない。

「まったく。こいつ昔から飲んでるうちに程度分からなくなるとこ変わってないな。」

「リブ。道案内頼む。」

「そのためにつれてきたのかよ。」

店から出たところでジルとリブは自己紹介をした、その間口キは入り口のところでぐったりしていた。

「じゃあ、俺は宿舎に帰らなきゃならないから、ここでお別れだ。またなつて言つといてくれ。」

ジルは丁寧にそういつてリブとローキーを見送った。

「うん、よく言つとくよ。」

「じゃあ、気をつけてな。」

その後、なんとかホテルまで帰るとベアが手伝ってくれた。そのまま口キをベットにはおり投げるとリブもベットにもぐりこんだ。旅も一日目はこうして深けていった。

第一章 第二話 「嵐の夜、飛行都市ヴェレクタ」終わり。

第一章 第三話 「ヴェレクタ」共意思会談へ」

第一章 第三話 「ヴェレクタ」共意思会談へ」

翌日、三人は管理局に向かった。その間ローキは一言も喋らなかった。派手な二日酔いが続いているらしい。

ロビーで五分もすると手続きも終わり、三人とも一時間後には許可書を手にした。

「さて、これから視察に行くんだが、リブはどうする？」

「僕はいいよ。歩き回るのは疲れるし、難しい話聞いてもわかんないし。」

「だな。・・・ロキ、無事か？」

ローキはトイレからふらふらとやってきた。

「ああ、だいぶ良くなった。」

顔が真っ青だ。良くなってはいるようだけど。

「・・・出発前に飯でもどうだ？今なら食えるだろ。」

「ああ、何とかなるだろう。どこにいくんだ？」

「ホテルのラウンジにでも行こう。あそこなら軽食でもまともなもんが食えるだろう。昨日の夜、食ってきたが結構美味かったぞ」

「そうしよう。荷物取りに戻るついでもある。」

ラウンジでサンドイッチとかコーヒーとかを食べた。食べ終わるころにはローキの顔色もだいぶ良くなっていた。

「ああ、コーヒーがこんなに美味いと思ったことは無いよ。」

「ははは。昨日は大変だったぞ。リブにも感謝しとけ。」

リブは力なく軽く笑った。結局最後のほうなんか半分引きずって帰って来たようなもんだからだ。

「わるかったなあ、リブ。何でも言うこと聞いてやるよ。」

「あはは。そんなにいいのか？リブ？せつかくの機会だ、吹つか

けるだけ吹っかける。」

ベアがカップを置いて言った。

「じゃあなんか面白いものあったら買ってきて。」

「ああ、分かった。」

「いいのかよ、そんなので。」

「で、そろそろいくか。リブはどうするんだ？」

リブの頭の中には昨日の白髭オヤジのことがあった。

「・・・街をうろろしてるよ。お土産とかみてきたいし。」

ベアはそうかと言うと立ち上がり、バックを背負った。

「それじゃあ俺たちは行って来るぞ、知らないおじさんについて行くなよ？」

「あ、あはは。」

リブは街に出てきた。町中の街灯が輝き、昨晚とはまったく違った趣の町並みが続いていた。模様を描く石畳、赤や青、緑の家々の屋根、そしてレンガの町並み。街道を彩るちよつとしたオブジェの数々。これほどに綺麗な街だったなんて。リブは目に入るもの、手に触れるもの。そして異国の空気を吸い込み。心の底から湧き出るようなときどきとした感情の高揚を感じていた。

と、リブはポケットの中の地図を広げた。

「ごめんなさい、知らないおじさんについていこうとしてます。」

なんとなく小声で二人に謝った。足は髭オヤジの地図の示す方向へと向かって行った。

「さあて、今の状況つーもんを解説してくれるか？」

ベアの声。入国管理事務局。その二階の一室でロキとベア、そして管理局のエノアがソファーに座っていた。

「ええ、それと、私が今回水門の街の専従外交官と担当させていただきます。改めてよろしく。」

「ああ、よろしく。」

ベアはタバコを取り出した。そしてちらつとそれをエノアに見せた。
「ええ、かまいませんよ。どうぞ。」

ベアはちよつとにっとなつた。ロキは紐でまとめられた資料を手にとった。

「ガロンはなんて？」

少しの沈黙が流れた。ベアの吐いた煙だけが生々しくうねり、天井のダクトに吸い込まれていった。

「険悪です。非常に危険な状態と言えるでしょう。」

少しうつむいたエノアの暗いめがねの奥から鋭い眼光が見て取れる。
「現状では脱退だけが焦点になっていますが、今現在、ガロンは国内において空軍戦力の再配置を行うなど、表向き行動と言ふ行動はありませんが着実に相応な行動に出る準備を進めています。」

ベアはソファアーにもたれかかり、くびを真上に向けて煙を吐いた。

ロキはエノアの目から状況の深刻さを汲み取った。

「これは決して公式なものではありませんが、ガロン高官の間ではすでに戦争と言ふ選択肢は決定事項という情報もあります。」

ベアは身体を起こし、タバコを消した。

「で、それが確かなものつて言ふ証拠はあるのか？」

エノアはまた少しうつむいた。依然としてその眼光は二人に注がれていた。

「……。私もこの国で外交官をやつてずいぶんになります。開戦をあおるようなことを言つて何の得がありますか？」

「ベア、エノアさんはうそは言つていない。ガロン高官の話はともかく、あなたの経歴からして、それは間違いない。あなたの研究室時代の論文も拝見しましたし、外交官としてのコネクションもさすがと言えます。おそらく私の知りえたパイプ以外にも相当量がまだあると思いますよ。」

エノアが少し驚いたような顔をした。

「……そんな、いつのまに……。」

「……まあ、こりや下手にカマかける必要ないな。」

ベアが薄ら笑いを浮かべ、エノアを見た。彼はまた少しうつむいた。
「・・・今までであった方々の中で、あなたたちは最も頭が切れるようですね・・・。」

「ま、命どころか水門一つ一國がかかっているからな。信頼置くべきかは徹底的に調べることにしてるんだよ。・・・あんたもなかなかのやり手だ。だから余計な気遣い無しで話を出来ると思ったんだよ。」

「そうですねか・・・。なら、回りくどいこと一切無しで話を進めたいと思います。」

エノアの目にまた眼光が戻った。

「今回の会談でガロンは脱退、数日中には我が国に対し宣戦布告をするでしょう。」

「おう、昨日の小僧だな。迷ってるのか？」

工業地帯の真ん中で立ち往生していたリブのそばに大型のトラックが止まった。運転席から昨日の髭の親父が顔を見せていた。

「あ・・・。」

「まあ・・・乗れ。」

トラックにリブが乗り込む。親父はリブの顔を見ていた。リブは心底ほっとしていた。知らない街で、知らないところにきていたのだから当然である。かれこれ一時間ほど工業地帯をさ迷っていた。トラックはまだ動いていなかった。

「さて、わしはガーンだ。小僧、お前の名前は？」

「リ、リブ・クロアノート。」

「おう、よろしくな。で、うちに来る前にお前の船とやらを見ておきたいんだが、案内してくれ。」

ガーンはキーをまわし、エンジンをかけた。

「と言うと、西区の飛行船舶港か。近いな。すぐ付くぞ。」

道なんか分からなくなっていたから港を教えるのにずいぶん時間が

必要だった。が、ガーンはそこから港の場所を割り出した。

トラックはずいぶんと工業地帯を走り、今は大通りを走っていた、

「ところで、お前さんどこから来たんだ？」

「水門。」

ガーンはしばらく黙っていた。

「水門？何でまた。観光つてわけじゃなさそうだが？」

リブはちよつと考えた。昨晚のメガネの男が言った隠密性つていうのがちよつと気にかかった。

「ちよ、ちよつとね。知り合いが船直すのに行かなきゃ行けないからって言つてたから、ついでに連れてきてもらったんだ。」

「ふうん。」

トラックが止まった。

「さてと、付いたぞ。」

昨日付いた港とは印象が違うほどそこは広く、たくさんのいろんな形の飛行船舶が停泊していた。ガーンはトラックから降りてまっすぐ事務局に向かって歩き出した。

「あ、あれ！船はこっちだよ！？」

「勝手に持つて言つたらただの泥棒じゃろうが。おまいさんの船つて言う確認もいるじゃろうしの。」

「あ、そうか。」

リブはあわててずいぶん離れてしまったガーンを追った。

「すでに交渉のチャンスはないか・・・。」

灰皿はタバコでいっぱいになっていた。

「実際のところ、各国の諜報機関はガロンの動きを把握しているはずですが、一国として現実的な動きを見せないのはやむをえないと言えはそれまでです。・・・50年前、世界の崩壊が始まって以来、各国はいまだに自国を守り、生きていくのに必死なのでですよ。」

ローキーは資料を一枚取って眺め、言った。

「だが、それはガロンも同じだろう？」

エノアは手を前で組み、前かがみの姿勢で続けて言った。

「そうなんです。私の調査でもこれほどにガロンが強気な姿勢をしていることの理由が分かりません。依然として嵐は脅威であり続けています。強くはなれど、弱まったためしはありません。五年前の嵐を覚えていますか？」

五年前。世界中を襲った嵐の群れ。リブの父親の死んだ年だ。

「ああ。」

「・・・この街は例外ですが、ガロンにも多大なる被害が出たと聞いています。無論、私自身が足を伸ばし、状況を見てきました。確かに酷い被害でした。それから立ち直り、なおかつ軍事行動を展開し始めるにはあまりに早すぎます。」

ベアが空になったタバコをぐしゃりと握りつぶした。

「・・・ガロンは世界の維持に、あきらめたか・・・。」

エノアの眼は一種の確信を得ていた。部屋に長い沈黙が流れた。

第一章 第三話 「ヴェレクタ」共意思会談へ」終わり

第一章 第三話 「ヴェレクタ」共意思会談へ」（後書き）

連続した更新は一旦ストップいたします。

これからはゆっくりと更新していきますので、応援メッセージなど送ると勢いがつきます。よろしくね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9934a/>

古い月

2011年2月1日05時02分発行